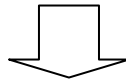


加西市 観光まちづくりへの提案

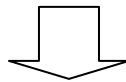
平成21年3月
近畿観光まちづくりアドバイザー会議

【提言】

加西市の観光まちづくりは、北条の宿や北条鉄道など今後観光資源として活用が考えられる萌芽はいくつか見られる。ただ目玉的な存在はないので、地元の人が関わり、時間をかけて長期的に育成していくことが必要だろう。



そのため、加西市の観光まちづくりを進めるための方向付けを明確にし、地域の人たちにとって指針となる「観光まちづくりビジョン」を策定したい。



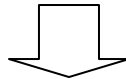
ビジョンを明らかにすることで行政・観光関係者・農林商工業者・住民等が参画する観光まちづくりの推進体制の事業活動がぶれず、選択と集中による持続可能なハード、ソフト整備が実現すると考える。

その前段として、近畿観光まちづくりアドバイザー会議では次項以下の提案を行いたい。

○STEP 1 【現状分析と推進体制づくり】

加西市には、北条の宿、北条鉄道、鶉野飛行場跡、法華山一乗寺など個々には魅力ある観光資源が点在している。しかしながら、いずれも単独で観光集客につながるような資源ではなく、相互に補完し連携していく体制が求められる。連携の担い手となるのはボランティアガイドであり、市民であることから、いかに地域全体で観光まちづくりの機運を盛り上げていくかにかっている。

その意味で、加西市は周辺地域を含めたインナープロモーションから手がけるべきであり、市民をリードする役割を新たな組織で担っていくべきだと考える。



視察時に意見交換した出席者を観光まちづくり推進母体として定期的集まるよう提案したい。

この推進母体を中心となって市民も参画した「観光まちづくりビジョン」を策定し、中長期的な戦略を明確化したい（後述）。

○STEP2 【個別資源の現状分析～視察後の印象から～】

① 五百羅漢・住吉神社・酒見寺

サイン、説明板が分かりにくい

→後述の「北条の宿まち歩き」の拠点として位置づけを明確化することによって、このエリアを統一感ある整備が可能になるものと考えられる。特に五百羅漢は、羅漢像を商品、特産化できる可能性が高い。

② 北条のまちなみ

生活と表裏一体の資源であり、住民のコンセンサスを得て、案内表示の整備を行えば観光スポットになる可能性は高い

→観光客向けのエリアを絞り、一部町屋の公開も検討したい。まちかどのベンチで観光客と地元住民が触れ合える仕掛けがほしい。

③ 北条鉄道

古い駅舎などローカルムードがあふれ、ボランティア駅長もユニークな取り組み。JRとの連携を強化していく必要がある。

→ボランティア駅長の存在を生かし、駅から始まるハイキングやまち歩きの設定、花による各駅のテーマづくり（車窓からの景観整備）。JRや神戸電鉄との割引切符、サイクル列車などイベント性のある特別運行。

④ ふく蔵

野菜中心の地産地消のメニューは魅力的だが、交通アクセスが不便。

→酒造りの見学コースを整備し、観光施設としての魅力を付加したい。

⑤ 法華山一乗寺

雰囲気があり、見応えがある。

→北条町駅、法華口駅からのルート（バスの運行、ハイキング・サイクリングコースの案内整備）。

⑥ 法華口駅・鶉野飛行場跡

雰囲気のある駅舎だが通学自転車の置き場になっており、やや興ざめ。滑走路跡は可能性を感じるが、表示やガイドを整備したい。

→他の駅も含めて、それぞれの駅舎をミュージアム的に位置づける。平和学習フィールドになる可能性が高い。滑走路跡はイベント会場になりえる。

STEP3 【観光まちづくりのキーワードとビジョン】

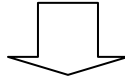
上記のSTEPを踏まえ、中長期間にわたって持続できる推進体制を構築し、個別資源の有効活用を図る上では、加西市の観光まちづくりを想起し市民らが共有できるキーワードが必要だと考える。

案：「生活交流都市 加西」

- ・ 既存の加西市の観光資源は、北条の宿＝「住」、北条鉄道＝「足」など、

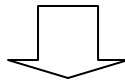
市民の日常生活に近接している。

- ・ 五百羅漢、住吉神社、酒見寺を案内する「子どもガイド隊」も地元学の一環であり、子どもたちの教育、生活の一部となっている。



市民生活と観光が表裏一体であり、まさに「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりが求められる都市であると言える。

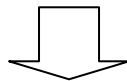
自らの生活の場が観光交流の場でもあるという認識を高めてもらうと同時に、観光交流のステージに市民 1 人 1 人が主役として立つ気運づくりが欠かせないものとする。



加西観光の特徴は、非日常性ではなく日常の延長上にあると言える。

そのため、昨年 11 月にオープンしたイオンの買い物客などに「寄り道」観光を提案し市内回遊してもらう働きかけが、加西独特の観光マーケティング策であるとも言える。

古くから暮らし、商いの場であった北条の宿を横軸、市民の足として活躍してきた北条鉄道を縦軸と捉え、その結束点である北条町駅を基点に市内を回遊する観光まちづくりビジョンを考えたい。観光客に日常の延長上で、どのような「安らぎ」「懐かしさ」「癒し」「発見」「暮らしの知恵」等を示すことができるかを議論したい。5 年後、10 年後にどのような観光まちづくりを実現し、市民と観光客が笑顔で交流できるビジョンを示したい。

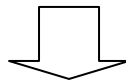


後述するコピー案「拍手かっさい！加西」は、市民と観光客が共同して作り上げていく手法として示した。現在行われている「北条の宿博覧会」等のイベントを活用してまち歩き、北条鉄道乗車、ハイキングなどのミニツアーを試行し、「拍手かっさい」ポイントのデータ収集等にも役立たせたい。

○ STEP4 【商品化とマーケティング】

観光まちづくりにおいて後発であることは否めず、ターゲットを明確にした旅行商品化、マーケティングが不可欠である。

前記した通り、まずは市民を中心としたインナープロモーションをメインとし、高速道路網など交通インフラを活用した近隣地域に向けた情報発信に取り組みたい。



1. 市民向け「まち歩き」「発見ツアー」の実施

「北条の宿はくらんかい」を充実し継続開催するとともに、市民や近隣住民を対象にしたまち歩きミニツアー、石や花をテーマにした市内のいいところを発見するツアーを実施したい。また鶺野飛行場跡地で、綱引きや10人11脚など市民運動会といったイベントも行いたい。

2. アピール・ポイントの精度を高める

まち歩き、列車&ハイキングをはじめ、当面は重点観光資源を絞り込み、そこに集中的かつ具体的に訴求する。JRとの連携、日帰りガイドブック出版社へのアプローチ、NEXCO西日本へのPRなど。

3. ガイド等人材の育成

加西市の観光資源の性格上、ガイドの同行が不可欠である。観光客の時間に合わせたガイドングの技術などを磨くことが必要。

北条鉄道のボランティア駅長も、観光客と接する第一線で活躍している人材であることから、各駅単位での観光まちづくりリーダーとしての役割を担っていただけるよう働きかけたい。駅ごとに駅周辺の住民で「応援団」的なまちづくり推進グループも組織化したい。

3. 旅行会社への働きかけ

- ・前提条件として旅行会社との契約が必要になってくる。
- ・北条鉄道、法華口駅、鶺野飛行場跡は教育旅行（平和教育）に取り上げられる可能性を秘めている。
- ・フラワーセンターはすでに旅行商品に取り上げられている例も散見で

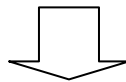
きる。フラワーセンターを旅行会社への情報発信の場として活用し、市内情報を提供したい。

- ・西国三十三霊場ツアーの昼食（特産品開発）、立ち寄りを旅行会社に提案したい。

上記を踏まえ、観光まちづくり加西のコピーを下記のように据えた。

「拍手かっさい！加西」 →添付パンフレット参照

- ① 加西と喝采をかけた語呂合わせのキーワードだが、市民参画をベースにした「わがまち自慢」を念頭に置いた。
- ② 拍手かっさい！なので、既存の観光資源にとらわれず市内のヒト・モノ・コトすべてを対象とすることができる。
- ③ 「かっさい度」という市民が勧める尺度を記載することで、観光まちづくりのシンボルとなることを意図したと同時に、明確な評価軸を示すことで観光客の旅行意欲を喚起することを目指した。
- ④ 観光資源、土産品などにも「拍手かっさい」を用いることで、地域内連携を高め、将来的にブランド化することも企図した。
- ⑤ 「拍手かっさい加西―食べ物編」「拍手かっさい加西―駅長人物館」「歴史ウォークで拍手かっさい加西」などなど、取り上げるテーマを細分化していくことができる。



「拍手かっさい加西」によって既存、新規を問わず
市民による観光資源を活用するイメージの共有と
観光客とともに加西観光を創出していく

なお、作成したパンフレットはアイデア案であり、アドバイザー会議で視察した場所をほぼ網羅した形になっている。実用面を考慮するとポイントを絞った打ち出し、歩く距離や時間の目安表示、北条の宿の「まあすわんなはれ」の写真を用い“あたたかいまち”を強調したデザインなども考えられる。